コロナ禍の幼児教育施設における保育に関する研究の動向
－幼児の人との関わりの育ちに着目して－

天野　美和子*

Research Trends in Childcare in Early Childhood Education Facilities in the Corona Disaster
-Focusing on the development of young children's interactions with others-

Miwako AMANO*

Abstract

For young children, meeting and interacting with a diverse range of people of different ages and other young children in the same community, is an experience necessary to develop their capacity/ability for lifelong relationships. In Japan, young children in many early childhood education centers had the opportunity to visit local senior citizens' homes on a daily basis to talk and play with the elderly. However, due to the recent Corona disaster, these facilities have been forced to limit the opportunities for young children to meet and interact with various people in the community. Will this situation have any impact on the development of young children's ability to build relationships in the future? If so, what specific actions and behaviors of the young children will this influence manifest itself in? In order to answer these questions, I believe that it is necessary to observe and monitor carefully and continuously the growth of young children who have experienced the coronal disaster over a long period of time.

The purpose of this study is to clarify the research trends in the early childhood education facilities of the Corona disaster during the period from early 2020 to October 2023. Thirty-nine papers were selected according to two keywords "corona" and "childcare" to investigate what kind of consideration and support should be given to young children in order to build their relationships. These articles were found to be categorized based on the following seven perspectives, and revealed that there were many difficulties faced by caregivers and their attempts to resolve them. (1) Young children's interactions in online-based childcare, (2) Young children's interactions in face-to-face childcare, (3) Wearing masks and interacting with others, (4) Interactions with people in the childcare curriculum, (5) Delayed development of human relationships, (6) Interactions with people during the transition from early childhood education facilities to elementary School, (7) Relationships with various people, including different generations and people in the community. In the face of the corona disaster, where people are required to stay away from each other to prevent infection, it is essential for childcare activities to bring people into contact with each other and to connect with each other.

Keywords：corona disaster, corona disaster childcare, early childhood education, ability to build relationships

1. 問題と目的

〈1-1〉 問題となる背景

2020 年初頭に世界を襲った新型コロナウイルス感染症は，わが国においては今年 2023 年 5 月 8 日より，感染症の位置づけが季節性インフルエンザと同様の 5 類へと移行した。それに伴い，3 年余り続いた国のコロナ対策は大きな節目を迎えることとなった。しかし，感染症の性質上，その感染拡大や新たな感染症の発生の可能性等を踏まえると，今後も状況は変化すると考えられる。

当初の感染拡大に伴う社会生活への影響や国の対策を振り返ると，概ね以下のような流れであった。わが国では，2020 年 1 月 28 日に新型コロナウイルス感染症を「指定感染症」とする政令が閣議決定されて以降，私たちの日常の生活において様々な自粛が要請されるようになった。同年 2 月には，厚生労働省より一律の自粛要請こそ見送られたものの，各種イベント開催の検討を求める声明も出された。

さらに，文部科学省は，都道府県教育委員会に対して，各地域の感染状況に応じて積極的な臨時休校の検討を求めた。感染者との濃厚接触が確認された子どもは 2 週間の出席停止とするという目安が示されたのもこの時期であった。そして，このコロナ禍において初めて，首相が全国の学校に対して同年 3 月 2 日からの一斉休校を要請する事態となった（日本子どもを守る会，2020）。

子どもたちは，この一斉休校により感染を防ぐために，極力，友だちや地域の人々との接触を避けて，多くの時間を家の中で過ごす日々となった。特に幼児期の子どもにとって，保育者や年齢の近い幼児同士で関わることはもちろんのこと，地域社会で共に暮らす多様な人々と出会い，関わり合うことは，生涯にわたって人と関わるための基盤となる力を育む上で欠かせない経験となるのは

*東海大学児童教育学部
ISSN 2758-4488

自明のことである。

この重要性については，幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下，要領や指針）にも示されている。たとえば，要領や指針の 3 歳以上児の保育内容では，「人間関係」のねらいの一つとして「身近な人と親しみ，関わりを深め，工夫したり，協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい，愛情や信頼感をもつ。」と記されている。そして，その内容の中に，「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。」と示されている。これらのことからも，幼稚園・保育所・認定こども園等（以下，幼児教育施設）内での幼児同士の関わりだけではなく，幼児とは年齢も世代も大きく異なる人たちや，地域で共に暮らす様々な人たちと関わることが，幼児期の体験には必要とされていることが分かる。

コロナ禍に見舞われるまでは，多くの幼児教育施設の日常の保育の中で，幼児が地域の高齢者施設を訪問して高齢者に昔の遊びを教えてもらったり，運動会や生活発表会の際に園に招いたりして交流し，互いに触れ合う機会が持たれていた。また，高齢者との交流だけではなく，近隣の小学校や中学校，高等学校の生徒とも交流し，日々の幼児教育施設内での生活では関わる機会の少ない世代の人たちと触れ合う体験をしていた。

しかし，この度のコロナ禍により，教育・保育の場において，地域の様々な人と交流し触れ合うことを制限せざるを得ない状況が長きにわたり続いた。このような事態は，今後，幼児の人との関わりの育ちに何らかの影響を及ぼすのだろうか。そして，その影響があるのならば，それは具体的に子どものどのような言動や姿として表れてくるのだろうか。これらの問いを明らかにしていくためには，コロナ禍に幼児期を過ごした子どもが，今後どのような人との関わりの育ちの経過を辿るのかを継続的に長期にわたって丁寧に育ちの姿を見取っていく必要があると考える。以上のことは，この度のコロナ禍のような長期にわたるパンデミック下において，幼児教育施設や保育者は，幼児の人との関わりの育ちをどのように支えていけばよいのかを見出すために必要な材料であると考える。よって，まずは，コロナ禍以降の幼児教育施設における幼児の人との関わりの育ちに関するこれまでの研究の動向を整理しておきたい。

〈1･2〉　研究の目的

そこで本研究では，コロナ禍以降すなわち 2020 年初頭から 2023 年 10 月（本論文執筆時点）までの期間における幼児教育施設の「コロナ」と「保育」をキーワードとして検索された研究論文や実践報告，調査資料等の文献を基に，幼児教育施設の教育・保育における幼児の人との関わりの育ちに関する議論を整理・概観する。これにより，3 年余り続いたコロナ禍の幼児教育施設での教育・保育において，幼児の人との関わりの育ちを支えるという側面からどのような議論がなされ，問いが生まれ，取り組まれてきたのかについての研究動向を明らかにすることを本研究の目的とする。

2.　研究の方法

〈2･1〉　対象とする文献の選定

本研究で対象として取り上げる文献の選定方針は以下の通りである。この 3 年余りのコロナ禍の動向を整理するにあたり，コロナ禍以降すなわち 2020 年初頭から 2023 年 10 月（本論文執筆時点）までの期間における幼児教育施設の「コロナ」と「保育」をキーワードとして，国立情報学研究所が運営する論文データベースである CiNii Research により検索を行った。まずは，CiNii Research の論文種別で「論文」に該当するもののうち，その本文・本体にリンクがありアクセス可能な 235 件を選定の対象とした。さらにその中から，幼児教育施設における幼児の人との関わりの育ちや保育内容の人間関係について言及されている内容のものを選定したところ 39 件であった。本研究では，この 39 件を幼児教育施設の教育・保育における幼児の人との関わりの育ちに関する議論を整理・概観するための対象とした。表 1 は，選定された 39 件の文献の発表年ごとの件数を示したものである。

表 1　本研究で取り扱う文献件数

発表年	件数
2020 年	2
2021 年	14
2022 年	17
2023 年	6
合計	39

〈2･2〉　文献の分類による整理

選定した 39 件のそれぞれの文献が，幼児の人との関わりの育ちについてどのような視点から論じられているのかに着目し，共通点や類似点がある文献を同じグループにまとめて整理した。

3.　結果

〈3･1〉　文献の分類による整理

39 件の文献を幼児の人との関わりの育ちについてどのような視点から論じられているのかに着目し，共通点や類似点がある文献を同じグループにまとめて分類した結果，以下の通り 7 つの視点に分類することができた。この 7 つの各視点から論じられている文献を表 2-1～2-7 に示した。表 2-1～2-7 の「視点からの要点」とは，該当論文を 7 つの各視点から読み取り，その要点をまとめたものである。なお，文献によっては，複数の視点が含まれている場合もある。

(1) オンラインや動画配信等を活用した遠隔での保育

における幼児同士の関わりの視点
(2)対面での保育における幼児同士の関わりの視点
(3)マスク着用と人との関わりについての視点
(4)保育内容における人との関わりの視点
(5)人間関係の育ちの遅れについての視点
(6)園から小学校への移行期における人との関わりの視点
(7)異世代や地域の人など様々な人との関わりの視点

〈3･2〉　オンラインや動画配信等を活用した遠隔での保育における幼児同士の関わりの視点（表 2-1 を参照）

この視点から論じられている文献は，表 2-1 の通り 7 件（2020 年に 1 件，2021 年に 3 件，2022 年に 3 件）が該当し，たとえば以下のような議論が展開されている。コロナ禍初年に発表された吉田・岩本（2020）においては，カリフォルニアのある幼稚園での同時双方向によるオンライン保育の事例が取り上げられており，そこではオンラインでの製作活動場面において，画面越しではあるが幼児間での製作に関連する会話を交わす幼児の姿が捉えられている。国内の幼児教育施設での事例として，田島・渡邉・濱名・境愛・中坪（2021）では，絵本の読み聞かせと，野菜の栽培活動を同時双方向型のオンラインでの保育実践事例が取り上げられており，そのオンラインでの活動において，子ども同士がつながる様子が見られたと報告されている。そして，郵送やオンデマンドによる動画配信よりも，Zoom 等による同時双方向型の保育実践の場合は，リアルタイムで行われるので，幼児同士のつながりを得やすいのではないかと考察されている。また，中村・前田（2022）で実施された保護者と保育者へのアンケート調査においては，緊急事態宣言時の休園の際に，子どもが自分だけが休んでいるのではないかと不安がっていたが，オンライン保育が実施されたことにより，友だちや先生の顔を見ることができて安心できたという記述も見られた。これらは，オンラインを活用した保育実践へのポジティブな捉え方の側面である。その一方で，小田・橋浦（2021）は，コロナ禍において，オンラインでの保育はやむを得ないことであるが，果たしてオンラインでの保育は保育の場となり得るのかという問いを投げかけ，オンラインでの保育の限界についても言及している。

表 2-1. オンラインや動画配信等を活用した遠隔での保育における幼児同士の関わりの視点

発行年	タイトル / 著者名 / 雑誌名，巻，頁	視点からの要点
2020	「コロナ禍における保育の果たす役割 ：カリフォルニア州私立幼稚園におけるオンライン保育をてがかりに」 吉田貴子・岩本茉莉， 大阪国際大学紀要，34 (1)，pp.73-82	オンライン（同時双方向）での製作活動場面において，幼児同士の画面越しでの会話などの関わりが見られた（カリフォルニアのある幼稚園での保育実践事例より）。
2021	「〈特集：コロナ禍における教育活動〉あるべき保育の姿を見つめて：コロナ禍における幼稚園」 高田憲治，人間教育の探究，33 (0)，pp. 25-31	新しい生活様式を踏まえた園生活を基本としながらも，密を完全に避けた保育活動は幼児の主体活動を展開する上で不可能である。しかし，徹底は困難だとしても「子どもの日常を守る」ことを基本として，できる範囲で密を避けた取り組みは可能である。試行錯誤しながらも保護者地域と連携して行っていくしかない。
2021	「コロナ禍における遠隔会議システムツールを用いた保育実践の可能性と課題：3 歳児クラスの絵本の読み聞かせと栽培活動に着目して」 田島美帆・渡邉真帆・濱名潔・境愛一郎・中坪史典，幼年教育研究年報，43，pp.63-72	保育者視点からの保育実践の工夫や感想ではなく，実際の子どもの言動を分析した。保育教材の郵送や動画配信よりも，Zoom 等による同時双方向型の保育実践（事例：絵本の読み聞かせ，野菜の栽培活動）の方がリアルタイムで関われるため，子ども同士のつながりが見られた。
2021	「宮城県仙台市における保育現場の新型コロナウイルス感染症対策の現状について（第１報）」 小田幹雄・橋浦孝明，羽陽学園短期大学紀要，11(3)， pp.33-50	オンライン保育では保育の場となり得るのかというオンラインの限界について。

2022	「Zoom を利用した保育現場からのオンライン保育の試み：2020 年のコロナ禍における実践の保護者・保育者への調査」 中村俊哉・前田美知代，常葉大学健康プロデュース学部雑誌，16(1)，pp. 73-81	保護者と保育者対象のアンケート調査結果の中に，緊急事態宣言時のオンライン保育で，友達や先生の顔が観られて安心した（自分だけが休んでいるのではないかと不安だったので）という記述が見られた。
2022	「コロナ禍における日本の保育現場の現状と課題：タイのインターナショナル幼稚園におけるオンライン授業の実践を通じて」 福井逸子・山本一晴，神戸親和女子大学児童教育学研究，41，pp.121-132	タイの幼稚園は小学校の準備教育の位置づけである。コロナ禍はオンライン授業を行ったが，学習のみならず，クラスの友達との交流が出来ることが園児にとって好まれていた。
2022	「ポストコロナ時代に活躍する遠隔保育技術」 阿部香澄，計測と制御，61(3)，　pp.227-230	育児・保育分野における人とロボットとのインタラクションと距離の事例として，テレ保育ロボット ChiCaRo と遠隔保育技術についての試みについて。

〈3･3〉　対面での保育における幼児同士の関わりの視点（表 2-2 を参照）

この視点で言及されている文献は，表 2-2 の通り 15 件（2020 年に 1 件，2021 年に 7 件，2022 年に 6 件，2023 年に 1 件）が該当した。たとえば以下のような議論が展開されている。松島（2020）は，A 幼稚園の取り組みについて取り上げており，異年齢交流は中止としたが， 5 歳児クラスの対面での保育においては，子ども同士の手をつなぐ，顔を寄せ合う等は制限なしとするなど，カリキュラム・マネジメントに沿って，必要以上に情報に振り回されることなく，状況に応じた柔軟な保育を実践したことが報告されていた。鮫島・甲田（2021）は，年長の恒例行事である「お泊り保育」をコロナ禍という制約の中で，泊まることをしない「夜の幼稚園」という行事に変えて実施したという事例の中で，その実施にあたり，子どもたちの話し合い活動が生じ，自立心などの育ちの姿が見られたと報告されている。また，池田（2021）においても，コロナ禍の制限のある環境構成のなかでも，子ども同士の感性の共感や他者への理解が成り立っていることが示されている。これらの報告から，例年と異なるコロナ禍という制限された状況であっても，保育環境や実践の工夫により，幼児同士はその関わりを通して互いに刺激し合っている様子が窺える。しかし一方で，特に食事場面において，パーテーションの設置や，黙食が求められたことにより，友だちと楽しく話しながら食事をすることができなくなったことへの保育者の懸念についても報告されていた（遠藤・小野，2022；中山，2022）。また，三上（2021）では，コロナ禍の保護者アンケート調査結果より，「友だちと遊ぶ機会が少なくなった」「友だちと会話をしたりして食事をする楽しみがなくなった」などの保護者の心配事も示されていた。

表 2-2. 対面での保育における幼児同士の関わりの視点

発行年	タイトル / 著者名 / 雑誌名，巻，頁	視点からの要点
2020	「新型コロナウイルス感染拡大予防対策下のカリキュラム･マネジメント　：A 幼稚園 5 歳児クラスの実践を中心に」 松島英恵，新見公立大学紀要，41，pp.71-78	異年齢交流は中止としたが，5 歳児クラスの保育においては，子ども同士の手をつなぐ，顔を寄せ合う等は制限なしとした。
2021	「〈実践〉保育をつなぐ：お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 Vol.8：新しくつくる：新型コロナウイルス感染予防の中での日常」 佐藤寛子，幼児の教育，120 (1)，　pp.26-31	コロナ禍における 3 密を避ける生活は，「つながり」を大切にする保育において矛盾することであり保育者らは戸惑った。しかし，子ども達の遊びにおいては，人とのつながりが日常に自然と生じていた。事例として，4 歳児 A 児の一人で車を作る事へのこだわりから，友だちと一緒に遊ぶことへの楽しさに気づき葛藤を経験したの

		もこの時期だった。
2021	「〈特集〉保育の「根本考察」にチャレンジ！14：“暮らし”の視点で保育を見直す一「コロナ」と保育《座談会 2020》 今，大切にしたい私たちの“暮らし”」 齋藤文雄，幼児の教育，120 (1)，pp. 20-21	消毒や食事の配膳は今までとやり方を変えたが，それ以外は今まで通り。子どもはマスクは不要（むしろ，窒息や熱中症で危険なため）。保育者は「やらざるえない」ことは「やるしかないよね」という前向きな考え方の人が多い。「のんきに笑い合う，悔しくて泣き合うというような，本当に当たり前の生活をいかに重ねていけるかが大事」な局面である（事例：ドイツの幼児教育施設での保育より）。
2021	「コロナ禍における附属三松幼稚園年長クラスの子ども達と担任が紡ぐ保育実践」 鮫島良一・甲田美香，鶴見大学紀要，第 3 部， 保育・歯科衛生編，58，pp.41-48	年長の恒例行事だった『お泊り保育』をコロナ禍という制約の中で，「夜の幼稚園」という行事で実施した。その実施にあたり，子どもたちの話し合い活動が生じ，自立心などの育ちの姿が見られた。
2021	「子どもの主体的な表現活動の表れ：造形遊びの場面に着目して」 池田純子，淑徳大学短期大学部研究紀要，63，pp.27-32	絵具を使った造形遊びで 5 歳児の色づくりを見ていた 3 歳児が「ぼくもやってみたい」と言って保育者に援助を求める姿が見られた。コロナ禍の制限のある環境構成のなかでも，子ども同士の感性の共感や他者への理解が成り立っていることが示された。
2021	「新型コロナウイルス感染禍における子どもの主体性を大切にした家庭と園の連続性：考察」 三上佳子，滋賀短期大学研究紀要，47，2，pp.36-45	コロナ禍の保護者アンケート調査結果より，「友だちと遊ぶ機会が少なくなった」「友だちと会話をしたりして食事をする楽しみがなくなった」などの保護者の心配事が示されていた。
2021	「新型コロナウイルス感染症は保育現場にどのような影響を与えたのか：宮城教育大学附属幼稚園におけるアンケート調査から」 溝田浩二・佐藤みちる，宮城教育大学環境教育研究紀要，23，pp.15-24	宮城教育大学附属幼稚園におけるアンケート調査からは，保育者とのスキンシップは減ったが，園児同士のスキンシップは変わらない。人との関わりの遅れへの不安は低い。という結果が得られた。
2021	「認定こども園における進級児・新入園児のかかわりの分析」 西山萌，質的心理学研究，20 (Special)， S235-S242	コロナ禍の少人数登園だからこそ見られた子ども同士（進級児の「気にかける行為」と新入園児の「気にかけてもらう行為」）の関係について。
2022	「エジプト・アラブ共和国における保育園の現状：新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて」 川村幹・神谷哲郎，鳴門教育大学国際教育協力研究，15，pp.199-203	エジプト・アラブ共和国の保育では，絵本の読み聞かせ，パペットシアター，個人で行う描画活動などのように，子ども同士が関わらずに行える活動が選ばれていた。

2022	「コロナウイルス感染症対策の反省と今後について」 落合幸子，京都女子大学教職支援センター研究紀要，004，pp.179-182	子ども同士が密にならないように遊ぶなどの注意点についての振り返り。
2022	「コロナ禍における園内環境の変化:新入園児受け入れでの幼稚園年少組担任の取り組み」 徳田多佳子，日本女子大学大学院紀要. 家政学研究科・人間生活学研究科，28，pp.179-188	ままごと遊びの中に手を洗う場面の模倣が頻発したり,鉄棒遊びをしないなどの姿が見られた。
2022	「コロナ禍の保育と保育現場の現状：保育を見直す」 中山美佐，大阪樟蔭女子大学研究紀要，12，pp.209-214	気になりつつも，食事は黙食を行った。しかし，パーテーションはせめてもの手作り（透明フィルムを動物の形にして保育者が手作りするなど）にして，子どもが楽しめるように工夫した。
2022	「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下の保育現場における協働と人間関係の諸相 ：食と園内での学びを視点として」 遠藤純子・小野友紀，学苑昭和女子大学紀要(970)，pp.35-49	食べることと楽しく話すことの両立の難しさについて。
2022	「保育･幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討(2)：2020 年度・2021 年度の動向と調査結果から」 野澤祥子・淀川裕美・中田麗子・菊岡里美・遠藤利彦・秋田喜代美，東京大学大学院教育学研究科紀要，61，pp.331-351	園へのアンケート調査で,他児との触れ合いが,幼児の年齢が上がるにしたがって,例年よりも少ないという調査結果が得られた。
2023	「コロナ禍における幼稚園・保育所の運動会の実態について」 岡澤哲子，帝塚山大学子育て支援センター紀要，4，pp.1-8	園への調査結果からは,運動会という行事において,コロナ禍でも子どもの成長がみられたが,「異年令での交流」については,それほど見込めなかったことが分かった。これは感染症対策の影響なのだろうかという問いを投げかけた。

〈3･4〉　マスク着用と人との関わりについての視点（表 2-3 を参照）

この視点で言及されている文献は，表 2-3 の通り 7 件（2021 年に 2 件，2022 年に 2 件，2023 年に 3 件）が該当した。いずれの研究においてもおおむね共通していることは，保育中の保育者のマスク着用により，幼児が相手の表情を読み取りにくいことや，声が聞こえにくいことでコミュニケーションに支障が出るのではないかという懸念についてであった。小田・橋浦（2021）は，仙台市で実施したアンケート調査により，保育者がマスクを着用していることにより，特に 0 歳児や障害児の場合に表情の読み取りに影響が出やすいのではないかと懸念されていることが示された。同様に，百瀬（2021）は特別支援教育の観点から，配慮を必要とする子どもの場合，目から下の表情がマスクに隠れて見えないことは，人の感情が読み取りにくい状況であると指摘している。この対策としては，保育者が「目の表現力」を意識したり，身体の動作を大きくしたりして表現するコミュニケーションの必要性が示されている。また，コロナ禍初年のパンデミックの時期を振り返った保育者への調査を実施した及川・中島・岩谷・井内・吉川・川田（2022）は，調査の自由記述の中に，保育者がマスクをした状態で子どもに笑いかけた時に，それに対して子どもが無表情のままだったというエピソードが記述されていたことが報告された。これについては，保育者の笑っている表情が子どもに伝わっていないということなのかと，保育者の複雑な心境についても触れられていた。また，宇野（2023）は，保育現場の葛藤と変化という観点から，2023 現在の感染状況とマスク着用の様子を考えると，「マスクって（本当に）必要だったのか」というマスク着用への疑問も投げかけられていた。

表 2-3. マスク着用と人との関わりについての視点

発行年	タイトル / 著者名 / 雑誌名，巻，頁	視点からの要点
2021	「宮城県仙台市における保育現場の新型コロナウイルス感染症対策の現状について（第１報)」 小田幹雄・橋浦孝明，羽陽学園短期大学紀要，11(3)， pp.33-50	仙台市を中心とした保育の状況を把握するためのアンケート調査を実施した。中でも「例年と園児の様子が違うと感じること」への回答として，保育者がマスクをしていることにより，特に 0 歳児や障害児にとって表情の読み取りに影響がでないかという心配や，保育は密にならざるを得ない状況であることについて述べられていた。
2021	「特別支援教育の知見をいかした学校経営(10)新型コロナウイルス感染症の影響下における学校や保育園の現状を考える」 百瀬和夫，教育総合研究叢書，(14)，pp.219-225	特別な配慮を必要とする子どもの場合，特にマスクで目から下の表情が見えないことは，人の感情を読み取りにくい。これは，幼児にも当てはまるということ。マスクから出ている「目の表現力」や欧米人並みに動作を大きくして表現するなどのコミュニケーションが求められる。
2022	「保育者たちがふり返る“COVID-19 パンデミック”の１年目」 及川智博・中島寿宏・岩谷樹・井内聖・吉川和幸・川田学，北海道大学大学院教育学研究院紀要，140，pp.117-154	保育者への調査の自由記述の中に，「保育者のマスク保育で，保育者が子どもに笑いかけても，子どもが無表情だった」というエピソードが見られた（これは，笑っている表情が伝わっていないということだろうか)。
2022	「保育者のマスク着用が，子どもとのコミュニケーションに及ぼす影響について」 下里里枝，教育総合研究叢書，15，pp.57-64	マスク着用に伴う育ちの弊害について。
2023	「コロナ禍における保育：保育者へのアンケート調査を通して」 鈴木順子，東邦学誌，52(1)，pp.19-32	マスク着用によるデメリット。表情が読み取りにくい。声が聞こえにくい。という調査結果が得られた。
2023	「コロナ禍における保育への影響」 金谷京子，聖学院大学総合研究所紀要，69，pp.55-72	マスク着用による保育のやりにくさや，子どもの育ちへの不安について。
2023	「コロナ時代の保育と子どもの育ち：保育現場の葛藤と変化」 宇野直樹，児童学研究，47(0)，pp.31-35	今の状況から考えると，マスクって必要だったのかという問いが生じる。

〈3･5〉　保育内容における人との関わりの視点（表 2-4 を参照）

この視点で言及されている文献は，表 2-4 の通り 3 件（2021 年に 1 件，2022 年に 1 件，2023 年に 1 件）が該当した。横井・鈴木（2021）では，コロナ禍において，保育者がどのようなことに困っているのかについてたずねた調査結果を基に，コロナ禍における保育施設の課題について言及されている。その中で，「領域　人間関係」をねらいとした活動に制限がかかっているという回答が見られたことが報告されており，領域の側面から考えてもコロナ禍における 3 密を避けるなどの感染防止対策の影響が，幼児の人との関わりの育ちを支える保育に影響を及ぼしていることが分かる。小田・橋浦（2022）は，幼児の人間関係の育ちを食事場面と関連させて言及している。食事場面で黙食が求められたり，一緒に食事をする友だちとの間がパーテーションで区切られたりすることは，感染対策としてはやむを得ないことなのかもしれないが，食事は幼児にとって単に「食べる」ことだけではなく，友だちと会話を楽しみながら食事をすることが大切で，その機会が失われていると述べられていた。

表 2-4. 保育内容における人との関わりの視点

発行年	タイトル / 著者名 / 雑誌名，巻，頁	視点からの要点
2021	「新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の中での保育施設の課題」 横井良憲･鈴木裕子, 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 6，pp.19-26	コロナ禍において, 保育者がどのようなことに困っているのかについて調査を行っている。7 月に実施されたⅡ期の調査において,「領域　人間関係」をねらった活動に制限を感じるという回答が見られた。
2022	「保育現場の新型コロナウイルス感染症対策の現状について（第２報）：食事場面の配慮について」 小田幹雄・橋浦孝明，羽陽学園短期大学紀要，11(4)，pp.41-53	食と人間関係の育ちへの懸念について。
2023	「新型コロナウイルス感染症拡大による入院中の子どもを支える上での看護師と保育士の困難感」 田中美樹・吉川未桜・吉田麻美・中原雄一・杉野寿子・池田孝博，福岡県立大学人間社会学部紀要，31(2)，pp.85-93	長期入院している小児病棟の子どもへの保育について。

〈3･6〉　人間関係の育ちの遅れについての視点（表 2-5 を参照）

この視点で言及されている文献は，表 2-5 の通り 7 件（2021 年に 1 件，2022 年に 5 件，2023 年に 1 件）が該当した。幼児の人間関係の育ちの遅れへの懸念については, 遠藤･小野 (2022) や, 大岡･木許 (2022), 内田 (2022) においてもコロナ禍の保育の様々な活動場面から言及されており，他の項目の視点の内容とも一部重なる部分も見られる。よって，ここではそれ以外の文献に着目して述べる。野澤・淀川・菊岡・浅井・遠藤・秋田（2021）は，コロナ禍初年から継続的に保護者・保育者を対象とした大規模なアンケート調査を実施している。その結果から論じられていることの一つに，幼児の人間関係の育ちの遅れについての視点は，コロナ禍のようなパンデミックの状況下においては優先順位が低いという点である。保護者や園の困りごとの優先順位の高い事柄としては, 保護者の場合は幼児教育施設が休園となり,「子どもを預かってもらえないこと」であり，園の困りごととしては,「情報提供方法について」であった。すなわち，幼児教育施設や保護者が，幼児の人間関係の育ちの遅れを懸念するようになるのは，必要な情報が手に入るようになり，感染状況がある程度落ち着いた頃であり，感染症の対策の仕方が分かってきたり，コロナ禍の生活の仕方に慣れてきた状況になった頃に生じる懸念であることが示唆された。

表 2-5. 人間関係の育ちの遅れについての視点

発行年	タイトル / 著者名 / 雑誌名，巻，頁	視点からの要点
2021	「保育･幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討」 野澤祥子・淀川裕美・菊岡里美・浅井幸子・遠藤利彦・秋田喜代美，東京大学大学院教育学研究科紀要，60，pp.545-568	保護者や園の困りごとは, 預かってもらえないことや情報提供方法がメインで保育内容については優先順位が低い。コロナが落ち着いたころに問題化するであろう事柄の中に, ようやく「人との関わりの遅れ」の記述が見られる。
2022	「コロナ禍が幼児の日常生活ならびに健康に与える影響　：2021 年２－３月の保護者へのアンケート調査より」 鈴木瑛貴・遠藤隆志・窪谷珠江・馬場彩果・植草一世，植草学園短期大学紀要，23(0)，pp.87-95	人とうまく関わる力の育ちへの影響への懸念。
2022	「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下の保育現場における協働と人間関係の諸相　：食と園内での学びを視点として」 遠藤純子・小野友紀，学苑昭和女子大学紀要(970)，pp.35-49	食事場面における人間関係の育ちへの懸念。
2022	「新型コロナウイルス感染症拡大の中で実践した保育とその	人間関係の構築などの遅れが生じる

	課題：保育所における 1 年間の実践を通して」 大岡徹洋・木許隆，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，21，pp.109-114	のではないかという懸念があるということについて。
2022	「新型コロナウイルス感染症蔓延が保育施設における幼児の諸活動に及ぼした影響」 内田雄，仁愛女子短期大学研究紀要，(54)，pp.29-34	ままごと遊びなどの減少により，人間関係の側面の育ちの遅れへの懸念について。
2022	「静岡県中部の市におけるコロナ禍での保育環境の課題 ：保育現場の声に基づく分析」 増田啓子，常葉大学保育学部紀要，(9)，pp.81-91	静岡県中部の調査コロナ禍の 1 年を振り返ると，言葉の遅れや笑顔の遅れは，特に気にならない。しかし，触れ合いが出来る日々に戻ってほしい。
2023	「保育の専門性と子どもとの関係性:コロナ禍の体験から考える」 西隆太朗，児童学研，47(0)，pp.36-44	コロナ禍におけるソーシャルディスタンスは必要だが，人と人との心理的距離を取る必要はないということについて。

〈3･7〉　園から小学校への移行期における人との関わりの視点（表 2-6 を参照）

この視点で言及されている文献は，表 2-6 の通り 1 件（2021 年に 1 件）で，河原（2021）の文献が該当した。これは，コロナ禍で友だちとの接触が制限された時期に，保育園から小学校への移行期を経験した子どもたちの友だち関係について保護者アンケート調査の結果を基に論じられている。アンケート結果からは，「年長時の仲良し」が同じ小学校にいない場合でも，その友だちがどうしているか気にかけたり，一緒に遊びたい願望があったりするなど，「年長時の仲良し」への思いが継続していることが特徴であることが示されていた。これについては，コロナ禍で新たな友だちとの関わりが制限されている下で，就学前までの友だちの存在が支えになっていたのではないかと考察されている。

表 2-6. 園から小学校への移行期における人との関わりの視点

発行年	タイトル / 著者名 / 雑誌名，巻，頁	視点からの要点
2021	「保護者アンケートにみる保育園から小学校への移行期における友だち関係:コロナ禍により友だちとの接触が制限されたことを考慮して」 河原紀子，共立女子大学家政学部紀要，67，pp.29-38	コロナ禍で友だちとの接触が制限された時期に，保育園から小学校への移行期を経験した子どもたちの友だち関係について保護者アンケートを実施した。その結果，「年長時の仲良し」が同じ小学校にいない場合でも，その友だちがどうしているか気にかけたり，一緒に遊びたい願望があったりするなど，「年長時の仲良し」への思いが継続していることが特徴であった。このことも，コロナ禍で新たな友だちとのかかわりが制限されているもとで，就学前までの友だちの存在が支えになっていたのではないか」と考察されている。

〈3･8〉　異世代や地域の人など様々な人との関わりの視点（表 2-7 を参照）

この視点で言及されている文献は，表 2-7 の通り 5 件（2022 年に 4 件，2023 年に 1 件）が該当した。渡部（2022）で実施された愛知県三河地区における調査では，幼児の祖父母会や，多様な人と交流できる行事が，感染防止対策のために中止となったことが報告されていた。同様に，大岡・木許（2022）においても幼児と祖父母との交流や，地域の老人ホームとの交流が中止となっていたことが分かる。幼児教育施設の幼児との交流を考えた時に，特に高齢者の場合は，他の若い年齢の人とは異なり，コロナに感染した際に重症化するケースも多いことが

一般に知られているため，コロナ禍での高齢者との交流の機会は，その多くが中止となっていたことが窺える。しかし一部では，直接的な交流は中止としたが，老人ホームの高齢者が幼児に手紙を書いて，玄関先まで手紙を届けるなどの間接的な交流を行っていたケースも報告されている。また，田中・吉川・吉田・中原・杉野・池田（2023）では，小児病棟で長期入院している幼児に対するコロナ禍の院内保育について報告されており，一般的な幼児教育施設とは異なり，幼児に何らかの疾患のあるため，院外の人と交流することには特に慎重になっていたことが分かる。しかし，コロナ感染患者の増加に伴い，小児病棟にも成人のコロナ感染患者が入院するため，担当の保育士は，幼児の患者と成人のコロナ患者が同じ病棟に混在することについての抵抗感についても言及されていた。

表 2-7. 異世代や地域の人など様々な人との関わりの視点

発行年	タイトル / 著者名 / 雑誌名，巻，頁	視点からの要点
2022	「愛知県三河地域の新型コロナウイルス感染症影響下における保育の実態」 渡部努，岡崎女子短期大学・岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要，55，pp.111-118	愛知県三河地区の調査結果によると，祖父母会など，多数の人との交流がある行事が中止となった。
2022	「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下の保育現場における協働と人間関係の諸相 ：食と園内での学びを視点として」 遠藤純子・小野友紀，学苑昭和女子大学紀要(970)，pp.35-49	給食の調理の人と子どもとのコミュニケーションが出来なくなった。
2022	「新型コロナウイルス感染症拡大の中で実践した保育とその課題：保育所における 1 年間の実践を通して」 大岡徹洋・木許隆，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，21，pp.109-114	「新しい保育」への課題を明らかにした。祖父母交流の中止。地域交流として，老人ホームとは，交流は中止したが手紙でのやり取りとした。
2022	「保育現場の新型コロナウイルス感染症対策の現状について（第２報）：食事場面の配慮について」 小田幹雄・橋浦孝明，羽陽学園短期大学紀要，11(4)，pp.41-53	地域の人と一緒に食事をする機会も減少している。
2023	「新型コロナウイルス感染症拡大による入院中の子どもを支える上での看護師と保育士の困難感」 田中美樹・吉川未桜・吉田麻美・中原雄一・杉野寿子・池田孝博，福岡県立大学人間社会学部紀要，31(2)，pp.85-93	小児科病棟の場合，コロナによる成人患者が混在することへの抵抗がある。異世代での交流が大事とは一言で言いきれない。

4.　総合考察とまとめ

本研究では，コロナ禍の 2020 年初頭から 2023 年 10 月までの期間に発表された「コロナ」と「保育」をキーワードとした論文や論考の中で，幼児教育施設の教育・保育における幼児の「人との関わりの育ち」に言及している文献を選定し整理・概観した。その 39 件の文献について，幼児の「人との関わりの育ち」についてどのような視点から論じられているのかに着目し，共通点や類似点がある文献を同じグループにまとめて分類した。その結果，以下のとおり，7 つの人との関わりの視点に分類することができた。

(1)オンラインや動画配信等を活用した遠隔での保育における幼児同士の関わりの視点からの研究では，これまでに経験のないパンデミックの状況下で，国内外の保育者らが試行錯誤しながらもオンラインを活用した保育実践が行われていたことが報告された。そして，オンラインだからこそ出来ることもあるというポジティブな捉え方が存在する一方で，あくまでも一時的な措置であり，オンライン保育の限界についても示された。(2)対面での保育における幼児同士の関わりの視点からの研究では，コロナ禍という制限された状況であっても，保育者による保育環境や実践の工夫により，幼児同士はその関わりを通して互いに刺激し合っている様子が窺える。しかし一方で，ソーシャルディスタンスや食事場面でのパーテーションの設置や黙食が求められたことにより，幼児同士での触れ合いに制限があったことへの保育者の懸念についても示された。(3)マスク着用と人との関わりについての視点からの研究では，マスク着用により互いに表情が読み取りにくい状況となり，多くの保育者が，そのことが今後の幼児の発達に何らかの影響が出るのではないかと心配していることが示された。(4)保育内容における人との関わりの視点からの研究では，3 密を避けるなどの感染防止対策が，指針や要領において幼児期の育ちとして重要とされている保育内容に制限が

かかることへの保育者の懸念について示された。(5)人間関係の育ちの遅れについての視点からの研究では，(4)の保育内容とも関連のあることだが，休園になったり，オンライン保育になったりするなどにより幼児の人との直接的な関わりが大幅に減少している状況が明らかとなった。また，保育者が幼児の今後の人間関係の育ちへの影響について懸念していることも示された。(6) 園から小学校への移行期における人との関わりの視点からの研究では，移行期の子どもが園での「年長児の仲良し」への思いが継続されていることが示された。このことは，小学校という新しい環境においても友達との接触が制限されていたため，一年生に就学した子どもが新たな友達との関係づくりに難しさを抱いている可能性も考えられる。(7) 異世代や地域の人など様々な人との関わりの視点からの研究では，地域の高齢者との交流が制限されたり，中止されたりしている状況が明らかになった。特に高齢者の場合，感染した際のリスクが大きいため高齢者側も幼児教育施設側も慎重な感染防止対策を講じていると考えられる。また，多くの幼児教育施設では，コロナ禍においては高齢者のみならず施設外部の人の出入りについては，かなり慎重な対応をしていたことも明らかとなった。

以上の 7 つの視点から幼児の人との関わりの育ちを概観すると，保育者らの臨機応変な対応とともに、多くの苦労や工夫が明らかとなった。感染症が拡大しているコロナ禍においては，「ソーシャルディスタンス」や「3 密を避ける」などの言葉にも表れているように，人と人とが近づかないことが求められる。しかし，教育・保育の営みは，人と人とが触れ合い，つながることが必要不可欠であるため，保育者らは不安や矛盾を抱えつつも，試行錯誤しながら日々の保育を工夫して取り組んできたことが分かった。その一つがオンラインを活用した保育である。対面ではないオンラインを活用した保育であっても，同時双方向型でリアルタイムに取り組む活動の場合は，幼児が相手のやっていることに興味や関心をもち自分自身の行動や活動に取り入れたり，互いに刺激し合ったりする姿も見られたことからも，今後のさらなる可能性が期待できるのではないかと考えられる。しかし一方で，これまでの対面での保育の代わりにはならないのではないかという，オンラインを活用した保育の限界についても指摘されていたことについても今後の検討が必要である。

また，コロナ禍のようなパンデミックの状況においては，幼児の「人との関わりの育ち」の側面については，保護者や保育者が取り組むべき優先順位としては低く捉えられていることも窺えた。しかし，世の中の感染状況が落ち着き，保育者や保護者にゆとりが出てきた頃に，コロナ禍において制限されていたことによる影響について問題意識を持ち始めるということも示された。野澤・遠藤・秋田（2023）は，クライシス・リーダーシップの観点から，今後コロナ禍が収束していく過程で何をどのように元に戻していくのかという視点での検討が必要と指摘している。筆者も，このコロナ禍が収束していく過程に注目し，幼児の人との関わりの育ちの側面を，今後，教育・保育がどのように補い支えていくのかについて検討することを今後の課題として引き続き研究に取り組みたい。

引用文献

阿部香澄（2022）．ポストコロナ時代に活躍する遠隔保育技術 計測と制御，61(3)，227-230.

遠藤純子・小野友紀（2022）．新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下の保育現場における協働と人間関係の諸相－食と園内での学びを視点として－ 学苑昭和女子大学紀要(970)，35-49.

福井逸子・山本一晴（2022）．コロナ禍における日本の保育現場の現状と課題－タイのインターナショナル幼稚園におけるオンライン授業の実践を通じて－ 神戸親和女子大学児童教育学研究，41，121-132.

池田純子（2021）．子どもの主体的な表現活動の表れ－造形遊びの場面に着目して－ 淑徳大学短期大学部研究紀要，63，27-32.

金谷京子（2023）．コロナ禍における保育への影響 聖学院大学総合研究所紀要，69，55-72.

河原紀子（2021）．保護者アンケートにみる保育園から小学校への移行期における友だち関係－コロナ禍により友だちとの接触が制限されたことを考慮して－ 共立女子大学家政学部紀要，67，29-38.

川村幹・神谷哲郎（2022）．エジプト・アラブ共和国における保育園の現状－新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて－ 鳴門教育大学国際教育協力研究，15，199-203.

増田啓子（2022）．静岡県中部の市におけるコロナ禍での保育環境の課題 ：保育現場の声に基づく分析 常葉大学保育学部紀要，(9)，81-91.

松島英恵（2020）．新型コロナウイルス感染拡大予防対策下のカリキュラム・マネジメントーA 幼稚園 5 歳児クラスの実践を中心にー 新見公立大学紀要，41，71-78.

三上佳子（2021）．新型コロナウイルス感染禍における子どもの主体性を大切にした家庭と園の連続性－考察－ 滋賀短期大学研究紀要，47，2，36-45.

溝田浩二・佐藤みちる（2021）．新型コロナウイルス感染症は保育現場にどのような影響を与えたのかー宮城教育大学附属幼稚園におけるアンケート調査からー 宮城教育大学環境教育研究紀要，23，15-24.

百瀬和夫（2021）．特別支援教育の知見をいかした学校経営(10)新型コロナウイルス感染症の影響下における学校や保育園の現状を考える 教育総合研究叢書，(14)，219-225.

中村俊哉・前田美知代（2022）．Zoom を利用した保育現場からのオンライン保育の試みー2020 年のコロナ禍における実践の保護者・保育者への調査ー 常葉大学健康プロデュース学部雑誌，16(1)，73-81.

中山美佐（2022）．コロナ禍の保育と保育現場の現状－保育を見直すー 大阪樟蔭女子大学研究紀要，12，209-214.

日本子どもを守る会（2020）．子ども白書 2020 かもがわ出版.

西隆太朗（2023）．保育の専門性と子どもとの関係性－コロナ禍の体験から考える 児童学研，47(0)，36-44.

西山萌（2021）．認定こども園における進級児・新入園児のかかわりの分析 質的心理学研究，20 (Special)，S235-S242.

野澤祥子・淀川裕美・菊岡里美・浅井幸子・遠藤利彦・秋田喜代美（2021）．保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討 東京大学大学院教育学研究科紀要，60，545-568.
野澤祥子・淀川裕美・中田麗子・菊岡里美・遠藤利彦・秋田喜代美（2022）．保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討(2)－2020 年度・2021 年度の動向と調査結果からー 東京大学大学院教育学研究科紀要，61，331-351.
野澤祥子・遠藤利彦・秋田喜代美（2023）．保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討（3）－クライシス・リーダーシップという観点からー 東京大学大学院教育学研究科紀要，62，373-394.
落合幸子（2022）．コロナウイルス感染症対策の反省と今後について 京都女子大学教職支援センター研究紀要，004，179-182.
小田幹雄・橋浦孝明（2021）．宮城県仙台市における保育現場の新型コロナウイルス感染症対策の現状について（第１報） 羽陽学園短期大学紀要，11(3)，33-50.
小田幹雄・橋浦孝明（2022）．保育現場の新型コロナウイルス感染症対策の現状について（第２報）－食事場面の配慮についてー 羽陽学園短期大学紀要，11(4)，41-53.
及川智博・中島寿宏・岩谷樹・井内聖・吉川和幸・川田学（2022）．保育者たちがふり返る“COVID-19 パンデミック”の１年目 北海道大学大学院教育学研究院紀要，140，117-154.
岡澤哲子（2023）．コロナ禍における幼稚園・保育所の運動会の実態について 帝塚山大学子育て支援センター紀要，4，1-8.
大岡徹洋・木許隆（2022）．新型コロナウイルス感染症拡大の中で実践した保育とその課題－保育所における１年間の実践を通してー 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，21，109-114.
齋藤文雄（2021）．〈特集〉保育の「根本考察」にチャレンジ！14 :「暮らし」の視点で保育を見直すー「コロナ」と保育《座談会 2020》 今，大切にしたい私たちの「暮らし」 幼児の教育，120 (1)，20-21.
鮫島良一・甲田美香（2021）．コロナ禍における附属三松幼稚園年長クラスの子ども達と担任が紡ぐ保育実践 鶴見大学紀要，第 3 部， 保育・歯科衛生編，58，41-48.
佐藤寛子（2021）．〈実践〉保育をつなぐ：お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 Vol.8－新しくつくる：新型コロナウイルス感染予防の中での日常ー 幼児の教育，120 (1)，26-31.
下里里枝（2022）．保育者のマスク着用が，子どもとのコミュニケーションに及ぼす影響について 教育総合研究叢書，15，57-64.
鈴木順子（2023）．コロナ禍における保育－保育者へのアンケート調査を通してー 東邦学誌，52(1)，19-32.
鈴木瑛貴・遠藤隆志・窪谷珠江・馬場彩果・植草一世（2022）．コロナ禍が幼児の日常生活ならびに健康に与える影響－2021 年２－３月の保護者へのアンケート調査よりー 植草学園短期大学紀要，23(0)，87-95.
田島美帆・渡邉真帆・濱名潔・境愛一郎・中坪史典（2021）．コロナ禍における遠隔会議システムツールを用いた保育実践の可能性と課題－3 歳児クラスの絵本の読み聞かせと栽培活動に着目してー 幼年教育研究年報，43，63-72.
高田憲治（2021）．〈特集：コロナ禍における教育活動〉あるべき保育の姿を見つめてーコロナ禍における幼稚園 ー 人間教育の探究，33 (0)，25-31.
田中美樹・吉川未桜・吉田麻美・中原雄一・杉野寿子・池田孝博（2023）．新型コロナウイルス感染症拡大による入院中の子どもを支える上での看護師と保育士の困難感 福岡県立大学人間社会学部紀要，31(2)，85-93.
徳田多佳子（2022）．コロナ禍における園内環境の変化：新入園児受け入れでの幼稚園年少組担任の取り組み 日本女子大学大学院紀要．家政学研究科・人間生活学研究科，28，179-188.
内田雄（2022）．新型コロナウイルス感染症蔓延が保育施設における幼児の諸活動に及ぼした影響 仁愛女子短期大学研究紀要，(54)，29-34.
宇野直樹（2023）．コロナ時代の保育と子どもの育ちー保育現場の葛藤と変化ー 児童学研究，47(0)，31-35.
横井良憲・鈴木裕子（2021）．新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の中での保育施設の課題 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要，6，19-26.
吉田貴子・岩本茉莉（2020）．コロナ禍における保育の果たす役割－カリフォルニア州私立幼稚園におけるオンライン保育をてがかりにー 大阪国際大学紀要，34 (1)，73-82.
渡部努（2022）．愛知県三河地域の新型コロナウイルス感染症影響下における保育の実態 岡崎女子短期大学・岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要，55，111-118.

付記　本研究は，JSPS 科研費 22K13676 の助成を受けたものである。